

保育者養成過程におけるリズムダンスの指導についての一考察

—オノマトペの持つリズム性に着目して—

村瀬 瑠美

Consideration on Rhythm Dance at Training School for Childcare Workers
Focus on Rhythmicity of Onomatopoeia

Rumi MURASE

キーワード：リズムダンス 動きのリズム 拍子とリズム オノマトペ

1. はじめに

幼児期の身体にとってリズムに親しむことは非常に重要である。「運動体感としての動きのリズムは、実際に運動することによってしか体験されることはなく、(中略)動きのリズムの体験が、実際に人を運動することへと誘い、そこに自分の体で積極的に運動することの楽しさをも成立させるのである」という浅田(1985, p.3)の言葉を借りるならば、リズムに対して鋭い感受性を備えている(浅田・畠山, 1985) 幼児期に、運動中に多様なリズムに親しむことは、後の発達や運動習慣に大きく影響すると考えられる。

実際に幼児が運動の中でリズムに意識的に親しむようになるのは、幼稚園や保育園等でのリズム運動やリズムダンス等の日々の保育の中ではないだろうか。遠藤(2006, p.97)がリズムを楽しむ活動について、「子どもにとっては目の前の保育者を見ながら一緒に動きを楽しむ活動である」と述べていることから、幼児がリズムの恩恵を最大限得るためには、お手本となってくれる保育者が身体でどのようにリズムを捉え、実践しているかが関わってくる。よって、将来保育者として子どもたちと接する保育者養成過程の学生は、幼児期のリズムの重要性を知り、教師として幼児をリードして活動できるよう、自身の身体でリズムを捉え、実践できなければならないと言える。

2. 問題の所在と幼児におけるリズム教育の先行研究の検討

はじめに幼児期にリズムに親しむことの重要性と、保育者自身のリズムの捉え方と実践の重要性を述べた。リズム運動には縄跳びや体操等、様々な種類があり、リズム運動やリズム活動、リズムあそびといった呼び名も様々である。本稿では特に、「人は幼児期では、身体運動の大部分がDancing」(鈴木, 1998, p.181)であることから、リズム運動の中でも舞踊的要素の強いものを「リズムダンス^{注1)}」として着目する。リズムダンスは幼児の活動に欠かすことのできない要素である。しかし、筆者の経験から、保育者養成過程の学生で、リズムダンス中に自身の身体でリズムを捉え、実践できる学生は少ない。学生の多くはリズムを音楽の拍子と混同して捉えている傾向があり、音楽の拍子に当て込んでいくような動きがリズムにのって踊ることだと捉えている場合が多い。邦(1960)は1960年代に、保育者が音楽の拍子と舞踊のリズムを混同していることを指摘しており、前述の筆者の経験から、この傾向は現代でも見られることが明らかとなった。

リズムという言葉について、平成20年から適用された保育所保育指針と幼稚園教育要領の「表現」領域の中でリズムに関する記述が見られる。保育所保育指針では、「保育士等と一緒に歌ったり、手遊びをしたり、リズムに合わせて体を動かしたりして遊ぶ」「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりす

る楽しさを味わう」という2つの内容の中でリズムについて触れられている。保育所保育指針解説書(2008)の中では、「保育士等と一緒に歌ったり、手遊びをしたり、リズムに合わせて体を動かしたりして遊ぶ」の項目で以下のような解説がなされている。

子どもは、身体機能が発達することにより、保育士等の声や音の響き、音色に親しむことから、保育士等の歌うわらべ唄などに合わせて体を揺らしたり、一緒に歌おうとします。また、手遊び歌などのしぐさを真似たり、歌に合わせてリズムをとったりするようになります(中略)一緒に歌ったり、リズムに合わせて体を動かすことを楽しんでいきます。(保育所保育指針解説書, 2008, p.91)

この解説で扱われているリズムとは、音楽的な要素の一つであるリズムを念頭に置いているように推察される。同様に、「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう」という内容の解説で扱われているリズムについても音楽的なリズムのことであり、運動のリズムではないと考えられる。しかし、幼児のリズム教育の歴史について、古市(2012)はリトミック、シュールベルク、コダーイシステム、Creative Dramaticをあげ、日本においてリズム教育が進められてきた歴史は古く、「リズムは身体を動かすことによってのみ教育できる、とした従来のリズム教育は確かに正しい」(p.115)と述べている。これによれば、幼児のリズム教育にはそもそも身体的・運動的な考え方があるはずである。

また、上で述べたように、現在の保育所保育指針と幼稚園教育要領について「リズム」という言葉は表現領域の中に含まれるが、改定以前には「音楽リズム」という領域があった。1990年の改定で「音楽リズム」と「絵画制作」が包括され、表現領域となったのである。以前の領域である「音楽リズム」に対して、石川(2013)は「音楽の三要素としてハーモニー、メロディと並ぶ場合のリズムではなく(中略)心身共に一体となった生命の躍動である律動的

な動きを重視するものとして、『リズム』という言葉を用いることにより、この分野の新しい発展を試みたのである」(2013, p.100)としているが、「本来音楽と身体の動きの一体的な表現を志向しているものの、その内情は非常に音楽的な側面に傾き、動きのリズムの側面は軽視されがちであった」(2013, p.101)と述べている。この「音楽リズム」が領域だった時代に、浅田(1985)は、「動きのリズムは、音楽などのリズムと異なる」(1985, p.3)とし、動きにリズムについて、音楽のリズムとは異なる特性を「人間の身体運動を基盤にしていること」「身体運動において現出するがゆえに時間性と空間性を合わせ持つこと」(1985, p.3)としている。浅田は「動きのリズムは、動きを音楽に忠実に合わせたり、音楽を動きで表現したりなどすることによって生じるのではない」(1985, p.5)と述べ、石川と同様に、動きのリズムが音楽のリズムに追従した関係にあるのではないことを示している。

以上をまとめると、「音楽リズム」領域の時代には、動きのリズムと音楽のリズムという概念はあったものの、リズムは音楽的な側面に偏りがちであり、「音楽リズム」という領域のない現在においても、動きのリズムという側面が保育に重要とされながらも、「リズム」という言葉ゆえに音楽的な内容としてのみ理解されることが起こっていると考えられる。幼児のリズム教育の歴史の中で、音楽のリズムと動きのリズムは異なり、身体運動によるリズム教育の重要性が説かれているにもかかわらず、なぜ保育者や保育者養成過程の学生たちは、音楽のリズム、拍子や動きのリズムを混同してしまうのであろうか。この理由として、実際の幼児の運動は音楽や歌とともに行われることが多いことがあげられる。この状況が幼児のリズム教育における動きのリズムと音楽のリズム、拍子の捉え方の混同に影響していると考えられる。

しかし、はじめに述べたように、幼児がリズムの恩恵を受けるためには、保育者の理解と実践が重要である。保育者の理解と実践を助けるのは、保育者養成課程での取り組みと経験ではないだろうか。

保育者養成過程におけるリズムダンスの指導についての一考察

本稿はこのような問題意識から、幼児期に体験すべきリズムとはどのようなものか、リズムと拍子の違いという観点から整理し、保育者養成過程におけるリズムダンスの指導について検討することとした。

3. 動きのリズム、音楽のリズム、拍子について

1) リズムと拍子

前項で、幼児におけるリズム教育が、動きのリズムよりも音楽のリズムに偏ってきた可能性を示唆した。本項では、そもそもリズムとは何か、拍子とどのように区別されるのかを検討する。

リズムと拍子の概念が区別されることについて、クラークス、L (1971; 杉浦訳) の論は、後のリズム研究に大きな影響を及ぼしている。クラークスの論によれば、リズムの語源はギリシャ語の *Rhythmus* であり、この単語は *rheein* (流れる) に由来している。よってリズムの特性は流動性であるという。一方、拍子の語源はラテン語の *tangere* (叩く) であり、人為性、同一性、反復性の点で、リズムとは区別される。語源からリズムと拍子の違いを見ると、二つの性質は異なっていると考えられる。また、リズムは拍子が完全に欠けていても完成した形であられるが、拍子はリズムの協働なくしてはありえないという。しかし、クラークスによれば、リズムと拍子は本質的に異なるものでありながら、人間の中で互いに融合し、結合するものである。これは拍子づけられたリズムが存在することや、拍子が加えられることによってリズムが高められる現象によって明らかであり、そのため、拍子はただの規則的現象ではなく、その中に「生命内実 (*lebensgehalt*, p.88)」が存在するという。これについて、浅田はクラークスを引いて、「リズムと拍子の関係は、機能的にはまったく逆のもの」(1985, p.2) ではあるが、拍子は動きのリズムの形成とその発現を助長する有効な働きをすると説明している。

このようなクラークスに端を発するリズム研究では、リズムは人間の生命的現象であり、生の喜びを生み出すという(浅田, 1985)。生命的現象であるリズムと拍子が互いに融合し、助

長しあうことで、リズムの体験は人間にとってより生命感あふれるものとなり、喜びを感じさせると考えられる。

本稿では、これらの論にのっとり、リズムと拍子を区別し、リズムと拍子が本質的に違うものでありながら、互いに融合し、互いの働きを助け合うという立場を取る。また、リズムと拍子のこのような関係が人間に生命を感じさせ、喜びをもたらすとする。

2) 動きのリズムと音楽のリズム

ここまで、リズムと拍子の概念的な違いについて検討し、本稿ではリズムと拍子の概念を区別するという立場を表明した。保育の場でのリズムという言葉の用いられ方には、同じ「リズム」という言葉でも、動きのリズムをさしている場合と、音楽のリズムをさしている場合があることや、動きのリズムと音楽のリズムのどちらもあらわしていることが多いように推察され、「リズム」という言葉の意味するところは曖昧である。そこで、保育における動きのリズムと音楽のリズムの関係を考察する。

幼児のリズム教育と言えば、その多くが音楽教育である。

そもそも音楽におけるリズムとは、音楽を構成する要素のひとつであり、最も基本的で重要であるとされる(大蔵, 1999)。リズムはテンポ、拍子、小節内のリズム・パターン、フレーズに分類できるという立場と(大蔵, 1999)、リズムを拍子と統合することは許されないという立場があるが(ザックス, K; 岸辺訳, 1979)、いずれにせよ、音楽はリズムから生まれたとされ、動的性質を持ち、運動を誘発するという(岡, 1987)。ダルクローズ, E, J (1975; 板野訳) は音楽と身体によるリズムを表裏一体と捉え、音楽のリズムはすべて人間の身体のリズムの後につくられたものであるから、リズムは動的性質を持つと述べている。

幼児においては、小池(2009)はリズムのあるものは全て音楽と捉えられると述べ、幼児の音楽教育と、身体の運動とは切り離せないものとなっているという。これは、幼児の音楽行動が日々の生活や遊びを通じた総合的な行動で

あるからとする見方が一般的である（伊藤，2010）。このような幼児の音楽教育には身体運動が伴うという考えから、リトミックや歌遊び、手遊びなど、幼児の音楽教育では音楽のリズムに運動が伴っているものが多く見られる。しかし、これらは音楽のリズムを主として、そこに運動を合わせたものであり、動きのリズムが独立して存在することを前提として扱われたものではない。体育やスポーツの領域では、動きのリズムは音楽のリズムとは明確に区別されており、佐野（1996）は動きのリズムについて、動きの中での「緊張と解禁による動きの力動構造」（1996，p.79）とし、「動きのリズムは、音楽のリズムではない」（1996，p.82）と述べている。

以上から、幼児のリズム教育において、動きのリズムと音楽のリズムは異なるものとされながらも、実際には動きのリズムと音楽のリズムの関係は曖昧にされ、特に音楽的側面からは、リズムの持つ動的性質によって、幼児の動きのリズムを説明しようとしていると言える。

ここで、本稿では前述の浅田の論（第2項「問題の所在と幼児におけるリズム教育の先行研究の検討」）にのっとり、保育におけるリズムを音楽のリズムと動きのリズムの二つの要素から成り立つとし、この二つは異なるものとする。しかし、この二つは全く関係なく存在するのではなく、音楽のリズムには動的要素が含まれているように、切り離せない関係にあると考えられる。特に、幼児期の日々の音楽活動、身体活動の境界ははっきりと分けられるものではなく、幼児においては動きのリズムと音楽のリズムは切り離すことは難しい。

3) 舞踊におけるリズム

では、本稿で着目しようとしているリズムダンスの属する舞踊領域において、リズムはどのように捉えられているのであろうか。

従来、舞踊におけるリズムは、音楽的な時間構造であるリズムのこののみを指すのではないとされている。吉崎（2005）は、身体のリズムパターンと音楽のリズムは全く別であると述べており、大町（1991）は、舞踊におけるリ

ズムの成り立ちは、「時間的なリズム、空間的なリズム、力的なリズム」の3つから考えなければならないとし、拍子は「時間的なリズム」の一要素と置いている。大町によれば、舞踊におけるリズムとは時間、空間、力性（力的）のリズムの掛け算であり、調和である。つまり、動きのリズム（力的リズム）、音楽のリズム（時間的なリズム）、空間のリズムは区別されるが、各リズムが関係しあうことで舞踊のリズムとして成立する（図1）。リズムと混同されやすい拍子は、音楽のリズムの一要素である。そのため、リズムを拍子と混同することは、舞踊のリズムを時間的なリズムの観点でしか捉えないこととなり、リズムがもたらしてくれる生命感を損ない、舞踊の生き生きとした形式は失われる（大町，1991）。

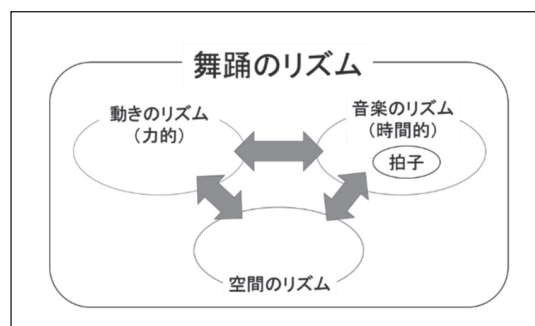


図1. 舞踊におけるリズム

また、舞踊教育においては、「リズムにのる」ということがリズムダンス教育において取り上げられることが多いが、「リズムに合わせる」という語ではなく「のる」という語を用いることに、動きのリズムと音楽のリズムの関係が見られる。大橋（2015）によれば、リズムにのるとは、「運動者が音楽と身体の動きのどちらかを能動的に志向し、他方を受動的に志向するという反転を行いながら、それらを一体化していくこと」（大橋，2015，p.242）である。ここにも動きのリズムが音楽のリズムに追従した関係にあるのではないことが見受けられる。ここから、動きのリズムと音楽のリズムが運動者の中で一体となることが、リズムそのもののにの

保育者養成過程におけるリズムダンスの指導についての一考察

ることにつながり、生命現象であるリズムにのことで、運動者は生命感を感じられると考えられる。

舞踊領域におけるリズムには、リズムにのっていくこと以外に、リズムを外していくこと、リズムをくずしていく^{注2)}こと等の言い方が存在している。これらはいずれも、動きのリズムにおいて、変化をつけることである。ここから、前述の「動きのリズムと音楽のリズムが運動者の中で一体となる」ということは、動きのリズムを音楽のリズムに一致させることではないと考えられる。運動者の中で、音楽のリズムとは別に動きのリズムが存在し、動きのリズムが単体として変化しつつも、両者が調和し、一体となって捉えられることが、舞踊のリズムをより生命感あふれるものにし、同時に舞踊の面白さや表現性にもつながっていく。

以上を踏まえ、舞踊におけるリズムとは動きのリズム（力的リズム）、音楽のリズム（時間的リズム）、空間のリズムから成り、これらは区別されるが、各リズムが関係しあうことで舞踊のリズムとして成立する。この3つのリズムの相互関係が舞踊表現において生き生きとした生命感をもたらす。動きのリズムと音楽のリズムに着目すれば、運動者の中で両者が一体化することがリズムの生命感を運動者に感じさせることにつながる。

4) 保育における動きのリズムと音楽のリズム、拍子

これまで、リズムと拍子の概念の違い、動きのリズムと音楽のリズム、舞踊におけるリズムについて検討、考察した。考察の結果、本稿における動きのリズム、音楽のリズム、拍子について得られた知見は以下の通りである。

①リズムと拍子は区別される。リズムと拍子は本質的に違うものでありながら、互いに融合し、互いの働きを助け合う。リズムと拍子のこのような関係が人間に生命を感じさせ、喜びをもたらす。

②幼児のリズム教育におけるリズムは、音楽のリズムと動きのリズムの2つの要素から成り立つとし、この二つは異なるものである。

しかし、この二つは全く関係なく存在するのではなく、特に幼児においては動きのリズムと音楽のリズムは切り離すことは難しい。

③舞踊におけるリズムは、動きのリズム（力的リズム）、音楽のリズム（時間的リズム）、空間のリズムから成り、これらは区別されるが、各リズムが関係しあうことで舞踊のリズムとして成立し、舞踊表現において生き生きとした生命感をもたらす。動きのリズムと音楽のリズムに着目すれば、運動者の中で両者が一体化すること（動きのリズムを音楽のリズムに一致させることではない）が、リズムの生命感を感じることにつながる。

これらの知見を踏まえ、幼児期に体験させるべきリズムについて考察する。

本稿において幼児にとって体験すべき、運動の楽しさにつながる多様なリズムとは、拍子とリズムが融合し、互いの働きを助け合いながら、音楽のリズムと動きのリズムが一体化したリズムとする。

4. 保育者養成過程におけるリズムダンスの指導

前項までで、本稿において幼児にとって体験すべき、運動の楽しさにつながる多様なリズムを、「リズムと拍子が融合し、その働きをお互いに引き出しながら、音楽のリズムと動きのリズムが一体化したリズム」とした。これを踏まえ、幼児にとって体験すべきリズムを、保育者が実践できるようなリズムダンス指導について考察する。

保育においてリズムダンスは日々の保育や運動会等、多くの場面で行われている。保育者が参考にできるようなリズムダンスのテキスト等も多く見ることができ、これらはリズムダンスの内容や振付、幼児にかけられる言葉について述べられており、保育者の身体やリズムの捉え方に対するアプローチはほとんどないと言える。しかし、はじめに幼児がリズムの恩恵を最大限得るためには、お手本となってくれる保育者が身体でどのようにリズムを捉え、実践しているかが関わってくると述べた。保育者養成課程の学生の多くは、舞踊の専門的教育を受けていない。そのため、養成課程でのリズムダンス

経験が学生のその後のリズムダンス観や、幼児への指導に直接影響するであろうと推察される。幼児にリズムダンスを指導する際、保育者が拍子をリズムと混同して捉え、実践することは、音楽の拍子のみに目を向ければ、リズムとのかかわりのない拍子は規則的で等分であり、幼児を規則的で等分な動きに導く可能性も考えられる。音楽のリズムのみに目を向ければ、動きのリズムが伴わず、運動の楽しみにつながりにくい可能性が考えられる。

では、保育者自身が「リズムと拍子が融合し、その働きをお互いに引き出しながら、音楽のリズムと動きのリズムが一体化したリズム」を実践できるようになるための、保育者養成過程でのリズムダンス指導はどうあるべきであろうか。

まずは、教師は用いる音楽の拍子ではない、音楽のリズム構造を理解し、学生に提示できることが重要である。ダンスをする際に、「1234…」というように拍子を数えながら動きを提示してしまうと、学生の意識の中に拍子が強く刻まれ、動きを等分で理解しやすくなり、拍子と拍子の間の意識が疎かになり、あらわれる動きも等分になりやすいと考えられる。拍子は動きを覚える際や、大人数で動きをそろえる際には有効ではあるが、まずは拍子から与えず、学生自身に音楽の拍子ではない、リズムを捉えさせるようにすべきである。

次に、教師は音楽のリズムと動きのリズムの違いを理解すべきである。音楽のリズムが必ずしも動きに当てはまるとは限らない。例えば、スキップをする際に、音楽のリズムが速すぎれば運動が追い付かず、駆け足になってしまう。スキップの「ととーん・ととーん」という動きのリズムを体験するためには、スキップの行いやすい音楽を選定し、動きと音楽が融合していくように指導する必要がある。

これらの注意点を考慮しながら、「リズムと拍子が融合し、その働きをお互いに引き出しながら、音楽のリズムと動きのリズムが一体化したリズム」を保育者養成課程の学生が体験でき、実践できるようになる手立てとして、オノマトペを用いた指導を提案する。

オノマトペとは擬音語や擬態語、擬声語の総

称である^{注3)}。幼児の身体教育の現場においてオノマトペは多用されている。先行研究の多くは、オノマトペのもたらすイメージの伝達性やイメージの共有に着目しているが^{注4)}、オノマトペの持つ、リズムを感じさせるという特性^{注5)}も着目されている。古市(2014)は幼児の動きを引き出しやすいのはオノマトペであると述べ、「リズムの要素をもっているオノマトペはこどもにとって快い響きとなり、身体表現を引き出す刺激となる」(2014, p.87)としている。有働(2007)はオノマトペを含んだ発話のリズムが幼児の受信と理解の進展を助けしていると、オノマトペの持つリズム性が幼児にとって影響が大きいことを示している。

以上のようにオノマトペは保育において、リズムを感じさせ、動きを引き出す言葉として用いられているが、これは幼児でなくとも有効であると考えられる。特にスポーツの領域では、オノマトペが運動者に対して直観的に動作感覚や動作リズムを理解させることができる^{注6)}と報告されている(藤野ら, 2005)。

これらを踏まえると、オノマトペの持つリズム性が、幼児にリズムを感じさせ、動きを引き出すことから、オノマトペは多くの身体教育現場で用いられていると推察されるが、保育者養成課程ではどうであろうか。オノマトペの持つリズム性が大人にも有効であるのなら、保育者養成課程の学生のリズムダンス指導にも有効であると考えられる。しかし、オノマトペは幼児に対峙しているときには多く発せられるが、大人や学生に対峙しているときには、さほど意識的に発せられないのではないだろうか。学生が「リズムと拍子が融合し、その働きをお互いに引き出しながら、音楽のリズムと動きのリズムが一体化したリズム」を実践できるようになるためには、オノマトペの直観的に動きのリズムを感じさせるというリズム性が大きな効果を発揮すると考えられる。なぜなら、舞踊運動もリズムも「今、ここで、私と、私たち」(村田, p.16)にあらわれる現象であり、その瞬間に直観的に感じるものが、リズムを捉えることに重要であるからである。よって、保育者養成過程におけるリズムダンス指導時にも、教師は意識的に適

保育者養成過程におけるリズムダンスの指導についての一考察

切なオノマトペを用いるべきである。

オノマトペを意識的にリズムダンスの指導に取り入れることで、次のことが期待される。

まず、前述の学生自身に音楽の拍子ではない、リズムを捉えさせるようにすべきという点に対して、オノマトペはリズムを提示するのに効果的な言葉となると考えられる。音楽のリズムと対応するような音韻構造・リズムを持つオノマトペを選ぶことで、学生は音楽のリズムを捉えやすくなる。

次に、音楽のリズムと動きのリズムの違いを理解し、動きと音楽が融合していくように指導すべきという点に対して、オノマトペによって捉えた音楽のリズムが、動きのリズムとのつながりを感じやすくなると考えられる。一方で、オノマトペによって捉えた動きのリズムは、音楽のリズムに対して、変化・調和させることで、動きと音楽の融合がスムーズになる。

つまり、オノマトペが音楽と身体の動きの間に位置し、音楽のリズムと動きのリズムを媒介しながら、両者の融合をスムーズにすることで、「リズムと拍子が融合し、互いの働きを助け合いながら、音楽のリズムと動きのリズムが一体化したリズム」を生むことにつながると考えられる。

図2は、本稿で考察されたリズムダンス指導時のオノマトペと音楽の拍子とリズム、オノマトペと動きのリズム・音楽のリズムの関係である。

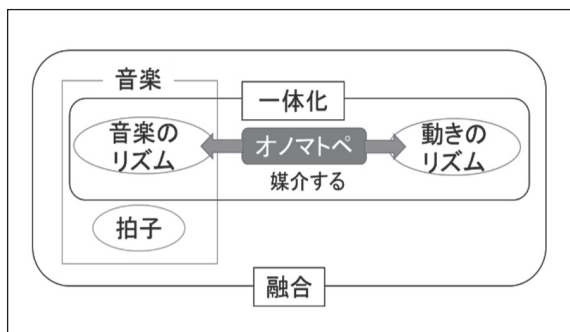


図2. 本稿におけるリズムダンス指導時のオノマトペと音楽の拍子とリズム、オノマトペと動きのリズム・音楽のリズムの関係

以上から、本稿では、保育者養成課程のリズムダンス指導について、拍子とリズムが融合し、互いの働きを助け合いながら、音楽のリズムと動きのリズムが一体化したリズムを学生自身に体験させるために、オノマトペの持つリズム性を理解したうえで、教師が学生に適切なオノマトペを提示することが、ひとつの指導法として提案された。

5. おわりに

本稿では、幼児期におけるリズム体験は重要であり、幼児がリズムの恩恵を最大限得るためには、お手本となってくれる保育者が身体でどのようにリズムを捉え、実践しているかが問題となるという視点から、幼児期に体験すべきリズムについて検討し、将来保育者となる保育者養成過程の学生へのリズムダンス指導について考察した。

本稿において幼児にとって体験すべき、運動の楽しさにつながる多様なリズムは、「リズムと拍子が融合し、互いの働きを助け合いながら、音楽のリズムと動きのリズムが一体化したリズム」と考えられた。本稿において「音楽のリズムと動きのリズムが一体化」とは、動きのリズムを音楽のリズムに一致させることではないと考察された。また、このようなリズムを保育者養成課程の学生が体験でき、実践できるようになる手立てとして、オノマトペを用いた指導を提案した。オノマトペの持つリズム性が、音楽のリズムを捉えやすくし、音楽のリズムと動きのリズムを媒介し、両者の融合をスムーズにすると考えられた。

しかし、本稿ではオノマトペを用いたリズムダンス指導の具体的な方法は提示することができなかった。今後、保育者養成課程におけるオノマトペを用いたリズムダンスの指導方法を、実際の学生の様子や反応等から具体的に検討することが課題として残された。

6. 注釈

- 1) 「リズムダンス」は小学校における学習指導要領の表現運動（中学年）の中の一つの項目である。小学校低学年では、フォークダンスを含む「リズム遊び」が項目名であ

- る。項目名は「リズム遊び」であるが、内容は「軽快なリズムに乗って踊ること」であり、ダンスを意図している。本稿で得られた考察が、幼児にとどまらず、次の学びの段階につながることも狙い、本稿では特にリズムダンスを取り上げることとした。
- 2) 村田 (2012) はリズムをくずすことについて、「素早く、ゆっくり、急に止めて等」(p.13) の変化をつけることであり、この変化がリズムダンスにおいてメリハリを生むとしている。また、変化が入ることで、リズムののりや動きが、子どもにとって面白く感じられ、長時間リズムダンスを続けられるという。
 - 3) 小野 (2015) によれば、オノマトペという語が用いられる理由は、まず一つに擬音語や擬態語等の用語は様々にあり、用法が錯綜しているため、総称として余計なニュアンスを含まない「オノマトペ」を用いることが便利であるからである。次に、ある語が擬音語・擬態語という区別のいずれかに決しがたい場合に、「オノマトペ」という言い方によって表すことができるからである。
 - 4) 幼児の身体教育領域で、オノマトペと幼児のイメージに関する研究では、下釜 (2013)、古市 (2014) などが挙げられる。
 - 5) 苧阪 (1999) は、擬音語・擬態語の特徴として、そのいずれもが動き、運動、成長などのリズムを内包させていることであると述べている。
 - 6) 運動指導中のオノマトペの長所と短所について、藤野ら (2005) は 4 つずつあげている。以下は長所である。
 - a) 言葉ではいい表せない複雑な動作内容も簡単に説明できる。
 - b) オノマトペを使用した指導の内容は次の機会でもその内容を覚えていられる (長期記憶)。
 - c) 複雑な動作やコツを学習する際、その時の動作内容をオノマトペに置き換えて覚えると効果がある。
 - d) オノマトペを発して運動すると、動作

rhythm・timing の把握や力が発揮しやすくなる。

オノマトペの短所については以下である。

- a) 伝えたい・知りたい動作内容の表現が曖昧になり解りにくい。
- b) オノマトペによる動作内容の説明では、具体的で正確な表現がうまくできない。
- c) 稚拙なイメージのため、使うのに抵抗感がある。
- d) 何を言っているのか、理解できないことが多い。

以上のようにオノマトペは、相互に矛盾する二つの命題 (長所と短所) が同等の妥当性をもって主張されることから、今後は二つの命題を相互に補完しフレキシブルに使用すべきであると藤野らは述べている。リズムダンスにおける使用でも、オノマトペ使用の長所と短所を考慮すべきである。

7. 引用・参考文献

- 浅田隆夫・畠山トミ編著 (1985) 動きのリズムあそび. 学術図書出版: 東京.
- ダルクロース, エミール, ジャック; 板野平訳 (1975) リズムと音楽と教育. 全音楽譜出版社: 東京.
- 遠藤晶 (2006) 幼児の身体表現の指導に関する保育者の意識について—身体表現の指導に関する困難さについてのアンケートの検討を通して—. 武庫川女子短期大学紀要 (人文・社会科学), 54: 91-99.
- 藤野良孝・井上康生・吉川政夫・仁科エミ・山田恒夫 (2005) 運動学習者のためのスポーツオノマトペ電子辞典の開発と評価. 日本教育工学会論文誌, 29 (4): 515 - 525.
- 古市久子 (2014) こどもの動きを引き出すオノマトペ絵本. 愛知東邦大学東邦学誌, 43 (2): 87-104.
- 石川眞佐江 (2013) 幼稚園教育要領における音楽活動の位置付けの歴史的変遷: 領域〈音楽リズム〉から領域〈表現〉への転換を中心に. 静岡大学教育学部研究報告教科教育学篇, 44: 97-109.
- 伊藤仁美 (2010) 保育者に求められる音楽表現

保育者養成過程におけるリズムダンスの指導についての一考察

- 力の育成に関する一考察. こども教育宝仙大学紀要, 1: 9-15.
- 亀山有希 (2008) 幼児教育におけるダンス・表現活動の導入に関する研究—リズムダンスを手がかりにして—. 日本体育大学紀要, 37 (2): 97-106.
- 厚生労働省 (2008) 保育所保育指針.
- 厚生労働省 (2008) 保育所保育指針解説書.
- 邦正美 (1960) 幼児の舞踊とその指導以前の問題 (音楽リズム特集号). 幼児の教育, 59 (6): 26-30.
- クラークス, ルートヴィヒ; 杉浦実訳 (1971) リズムの本質. みすず書房: 東京.
- 丸山美和子 (2007) リズム運動と子どもの発達. かもがわ出版: 京都.
- 文部科学省 (2008) 幼稚園教育要領.
- 文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領解説.
- 村田芳子 (2003) からだがはずむ, 心がはずむ (<特集>はずむ). 幼児の教育, 102 (4): 9-13.
- 村田芳子 (1991) 我々の時代にとって舞踊とは何か. 舞踊学講義. 大修館: 東京. pp.12-21.
- 村田芳子編著 (2012) 新学習指導要領対応表現運動—リズムダンスの最新指導法. 小学館: 東京.
- 難波正明 (2017) リズムと拍子に関する基礎的考察—L. クラークスの『リズムの本質』を中心に—. 京都女子大学発達教育学部紀要, 13: 11-17.
- 岡利次郎 (1987) リズム考. 草楽社: 東京.
- 小野正弘 (2015) 感じる言葉オノマトペ. 角川選書: 東京.
- 大蔵康義 (1999) 音と音楽の基礎知識. 国書刊行会: 東京.
- 大橋奈希左・坂井星太 (2015) ダンス教育における「リズムにのる」ことについての考察—音楽と身体のかかわりを視点として—. 上越教育大学研究紀要, 34: 235-243.
- 大町倫子 (1991) 舞踊のリズムと動き. 舞踊学講義. 大修館書店: 東京, pp.82-91.
- 鈴木裕子 (1998) 幼児の身体表現と保育に関する一考察. 名古屋柳城短期大学紀要, 20: 181-201.
- 佐野淳 (1996) 動きのリズムを見つける. 教師のための運動学運動指導の実践理論. 大修館: 東京. pp.78-85.
- 芦阪直行編著 (1999) 感性のことばを研究する擬音語・擬態語に読む心のありか. 新曜社: 東京.
- 下釜綾子 (2013) 身体表現におけるオノマトペを用いた動きとイメージ. 長崎女子大学紀要, 37: 78-83.
- 有働眞理子 (2007) 感性を身体で表すことば: 言語と音楽と身振りが調和する範疇. 神戸大学紀要神戸言語学論集, 5: 217-234.
- 柳瀬慶子 (2014) 表現運動における「文化的な価値」に関する研究: 「リズムにのるということ」に着目して. 高田短期大学紀要, 32: 77-86.
- 吉崎清富 (2005) 身体運動・舞踊・造形芸術・ダルクローズのリズム研究. 鹿児島大学教育学部研究紀要人文社会科学編, 57: 47-70.
- ザックス, クルト; 岸辺成雄訳 (1979) リズムとテンポ. 音楽之友社: 東京.